



For some in ancient books delight;
Others prefer what moderns write:
Now I should be extremely loth
Not to be thought expert in both.

山中恒、山本明編

『勝ち抜く僕ら少国民』

(世界思想社 一、八〇〇円)
(二五七頁)

子どもが少国民と呼ばれていた時代、少年たちはどんな生活をしながら、どんな本を、どんなふうに読んでいたか。これは本好きの元「少国民」が、戦時下の読書体験を問い直した仕事である。編者二人に、足立巻一、織田久、香内三郎、午島秀彦、尾崎秀樹、高崎隆治、清水碩が協力する。扱われる書目は、佐藤紅緑「あま玉杯に花うけて」、山中峯太郎「亜細亜の曙」、平田晋策「昭和遊撃隊」、江戸川乱歩「怪人二十面相」「新宝島」、吉川英治「天兵童子」、

南洋一郎「豪勇荒鷲艦長」、海野十三「宇宙戦隊」、岩田豊雄「海軍」、山本五十六の各種の伝記、などである。

はじめに山中恒、山本明による「十五年戦争下の少年軍事愛国小説」と題する序章があり、簡潔で視点の鮮明な見取り図を提示する。文芸派児童文学よりも「少年倶楽部」読物のほうが少年たちの望んだものを与えたという判断のもとで、少年読者へのサーヴィスの内容が分析される。また、一九三八年(昭和十三年)にはじまる内務省の統制の結果、「少年倶楽部」の魅力がうすれ、出版部数でも「芸術派」が浮上してくるという指摘が注目される。

編者の意図は明確で、これらの作品を「記号のテキストとして把握せず、具体的な歴史のなかで」把握することにある。そのために、「過去の読者による読書論」をつくること、「自分史」をつくることが要請される。軍国イデオロギーと単純に批判したり、「夢の王国」とあっさり持ち上げたりすることへの反撥もあって、読者の視点を選ばせたものと見受ける。自分の過去を語るときフィクションが入りこむのは避けら

れないのだが、具体的な生活感覚と日付けを重んじたのが幸じたようだ。そこで、本書の大部分を占める「少国民の現実とイメージ」の章では、旧植民地を含めた戦中日本の少年史の一面が、これらの読書を軸として描き出されることになった。わずかな年のちがいが、家庭環境や学校のちがいが、住んだ土地のちがいがいによって、本に対する感応もちがってくる。その細部がおもしろい。じつさい、統一的な少国民像などありえなかったのだ。総じて少年たちは状況にたいしてリアリストであり、物語のイデオロギー的な面よりもむしろ「科学的」な夢に没頭している印象がよい。もっとも清水碩によれば、「科学」という言葉がこれほど氾濫したことは、日本の歴史上曾て無かった」のであった。

特筆すべきは、執筆者の多くが、一九四〇年(昭和十五年)の前七、八年間の「少年倶楽部」や単行本を、何年も後になってから、たいていは「大東亜戦争」中に熱狂して読んでいたという日付けのずれである。彼らがすでに書店にはない本を、あるいは古本屋を駆けまわって見つけ、あるい

は友人の兄から借用し、仲間で廻し読む、その情熱の表現がもっとも素直に雄弁である。古本や古雑誌がこれほど何年にもわたり、数多くの読者の間でいつくしまれたことは、活字文化が大衆化して以来、稀有の現象であろう。ちなみに、編者よりわずかな年を経て生れた私には、もはやその幸運は恵まれず、これらのなかで往時読みえたのはわずかに数冊であろうか、その一冊の布製の表紙が与えた並ならぬ贅沢の感触を今に残すのみである。

松本 勤 (大学文学部教授)

丸尾直美、野間俊威、郡唄 孝、横山 彰

清川義友著

『次代を拓く経済政策』

(好学社
三二五頁 二、七〇〇円) A5版

七十年代の初めよりのこの一五年間、わが国でもいろいろな経済問題が生じた。あるものは経済政策で解決され、またあるものは未解決のままにされている。二度の石油ショックによるスタグフレーション、経済成長の減速と分配の不平等の顕在化、福祉国家への前進と将来における破産の恐

怖、財政赤字の累積と公共部門の非効率の是正、自然環境の破壊、国際収支の黒字化と貿易摩擦。

これらの問題のうち、国際経済問題の一部を除き、いずれの問題に興味を持つ者にも本書はその解答の手懸を与えてくれるだろう。

著者たちのうち三名が、本学で経済政策を担当する。野間、郡唄、清川の各先生である。三名を含め全員が、それぞれの専門領域で永年研究されてきた成果を、教科書としてまとめ、初学者にも理解し易いようにと努力されている。

テーマである「次」の時代を拓くにふさわしい経済政策とは何か、またそのための理論とは。この魅力に富む問題提起に対して、著者たちは断定的な解答を与えているわけではない。読者もそれを望むべきでないことは勿論承知の上で、あえて著者たちの主旨を示してみた。

先に挙げた諸問題は、資本主義経済の諸欠陥(とくに大量失業や分配の不平等、独占による弊害)の克服を目指した、三十年代から七十年代までのケインズ主義と福祉

国家を柱とする「混合体制」あるいは「大きな政府」のものでうみだされたものである。そこでこれらの問題を解決するため、アンチテーゼとしての「小さな政府」を目指して登場し現在隆盛のピークにあるのが、新自由主義思想とその経済理論(マネタリズム、合理的期待学派、SSE、公共選択理論など)である。

著者たちは、以上のように現在までを捉える一方で、この新自由主義政策が早晩行き詰まるものと見ているようである。本書の特徴の一つは、「次」の時代の経済政策体系が何かといえば、ケインズ以前の古典派資本主義の政策も含め、これまでのすべてのレジームの経験を踏まえ、その欠陥の多くを克服できるようなものでなくてはならないとする点であろう。その候補のひとつとして取りあげられるのが、福祉政策、所得政策、産業政策を各界の理解を得てスムーズに実施するための参加型の政策方式、「ネオ・コーポラティズム」である。

この「ネオ・コーポラティズム」を含めて、本書にはわが国で初めて体系的に紹介される議論がいくつもある。さらに本書

は、最新の経済政策の教科書として、すぐれた解説書にもなっている。

読者はまずテーマに魅せられて、そして読み進むにつれて議論の展開のおもしろさ明解さ、これまで未知とされた理論にぶつかる喜び、等々を十二分に味わうことができるであろう。是非一読をおすすめする。

西村 晃（大学経済学部教授）

マイケル・ポラニー著

マージョリー・グリーン編

佐野安仁、吉田謙二、澤田允夫監訳

『知と存在』

（晃洋書房 A5版）
三一六頁 三、〇〇〇円

本書は、科学・社会学・哲学等幅広い分野にわたってイギリスで活躍したハンガリー生まれのユニークな思想家マイケル・ポラニー（一八九一—一九七六年）が主として一九六〇年代に書いた諸論文を、マージョリー・グリーンが編集したもので、原著書は『Knowing and Being』題われ、The University of Chicago Press より一九六九年に出版されている。全体は十四の論文からなり、第一部「社会と社会理解」に関

するもの三篇、第二部「科学の本性」に関するもの五篇、第三部「暗黙的認識」に関するもの四篇、第四部「生命と精神」に関するもの二篇というように四部に分けられている。

科学的探究の本性についての考察から哲学へと向かう原著者の中心思想は第三部の「暗黙的認識」である。彼によればこの「暗黙的認識」とは、認識論の基礎を根本的に変革し、それと共に実証主義や道徳的ダイナミズム等に由来する現代の知的状況の克服を目指すものである。彼はそれを読書・道具使用・技能習得等々様々な例を用いて、部分から全体の統合へと至る包括的理解の過程として説明している。例えばある立体像に焦点を定めこれを感知する（focally aware）のは、別々の二つの像を補足的に感知する（subsidiarily aware）ことによると言い、具体的に補足的感知の機能的・意味論的・現象的諸位相をその構造契機とする暗黙的認識を説明している。（本訳書・第四部・二七〇頁）そしてさらに彼は身体と精神との関係をも、両者のいわゆるデカルト的二元性を拒否し、この暗黙知におけ

る定焦点的なものと補足的なものとの関連に基づいて説明しようとする。（二七九頁以下）

この暗黙知は部分から全体へ、補足的なものから定焦点的なものへの動的な階層的構造を成しており、固定的瞬間的なものではなく、生動的な世界形成の過程である。このような暗黙知という概念を用いることにより、現代の知的状況に新しい地平を切り開こうとする原著者の幅広い思想を、科学の本性についての考察から、社会的政治的な諸問題、生命や精神に関する諸問題に至るまで網羅した本書は、平易明解を心がける訳者達の努力を通じ、今後我国におけるポラニー思想の普及を一段と促進することであろう。

長澤邦彦（大学文学部教授）

加藤盛弘著

『現代の会計原則』

（森山書店 A5版）
二七三頁 三、五〇〇円

前著『会計原則の論理』において、いわゆる「一般に認められた会計原則」（GAAP）が成立した一九三〇年代のアメリカ

会計制度に焦点をあてて考察された加藤教授は、本書においては研究対象を現代のG A A P に移して、一九六〇・七〇年代以降新たにクローズ・アップされてきた、年金会計、偶発事象会計、リース会計、物価変動会計などの現代会計実務をとりあげて詳細に検討されている。

これらの現代会計実務は、見積・予測・評価などの伝統的に否定されてきた会計方法を積極的に実務に導入しようとするものであるから、伝統的なG A A P の形成方式だけではそれらの論理化は不可能となった。

本書は、その不可能さを克服してまでも現代会計実務をG A A P とみなそうとする、論理化の基盤、その方法、およびそれのもたらす効果について論じたものである。

まず、アメリカにおけるG A A P のあり方について序章で概括的に述べたあと、第一部においては『財務会計概念ステイメント』(一〜三)をとりあげて、現代会計実務をG A A P 化するうえでそれらがはたしている役割について論じられている。

つづく第二部においては、個々の現代会計実務が考察されている。そこで明らかにされていることは、現代負債会計の場合には、伝統的な会計のもとでは計上できなかった負債を計上することによって利益金額が縮小されることであり、現代リース会計については、リース契約時にリース資産とリース負債とを計上することによってそれらの償却を通じて利益を縮小させる機能をはたしているということである。また物価変動会計にしても、現実の機能は会計上の諸項目の数値の増減を行って究極的には利益数値の減少をはかろうとするところにあるとされるのである。

このように、現代会計実務がもたらす会計上の効果は、いわゆる近代会計理論が損益理論を標榜することによって資産の地位を後退させ、もって資産金額の縮小および利益数値の縮小を論理化したのと、方法は異なっているが、しかし会計上の狙いは同じく著しい利益数値の縮小効果であると主張されている。

そして、この利益の縮小は、法人税の減税、配当の抑制、公共料金の値上げなどの

経済現象に奉仕するものに他ならないとされるのである。この考え方は加藤教授の主張に一貫して流れている基本的な考え方であり、本書においても、この考え方に基いて、現代のアメリカ会計実務が小気味よく分析され、明快に論じられている。わが国の会計実務に大きな影響力をもっているアメリカ会計実務の最近の動向とその問題点を知るうえで恰好の一冊といえよう。

百合野正博 (大学商学部助教)

森田 進著

『詩集 野兎半島』

(書房ふたば A5版
九九頁 一、〇〇〇円)

「私ハ、洗礼ハ受ケテイマセンガ、
神ヲ信ジテイマス。」

——モウスグ釜山^{アザレ}デス。

アナタハ、関釜フ、エリ、ニ乗リ換エ
ナサイ。

サヨウナラ。

私ハ、コレカラ北上シ軍事境界線ヲ
見ニ行キマス。

ソコデ考エタイノデス。

分断サレタ国家ヤ民族ヤ歴史ニ

ツイテ。」
〈亀甲船〉より

学生時代から多くの在日朝鮮人・韓国人と接していた著者は卒業後教壇に立つようになるが、その最初の地が下関であった。かつては関釜連絡船が入った。そして今また関釜フェリーの出る港町である。釜山との便船は途絶えていたけれど、置きざりにされた人々の間には在日二世、三世が生まれ育ち、生活をつづけている。著者はここで様々な問題をきわめて具体的にかかえるようになる。通り一遍な政治的解釈などではとうてい計りきれない深淵を前にしたのである。その後四国に移り住んだ後も著者の姿勢は変わらない。執拗さは増すばかりである。その間一九七八年には韓国大田市(フジシマ)の崇田大学(インナム)で客員教授もしている。

いる日本人に対して、そして誰よりも著者自身に向けてくり返しくり返し問題を突きつけている。

縦糸に日韓の歴史をひき、横糸に個々の具体的な人々との交流を配して三十八度線に迫ってゆく。そのきつ先は鋭い。然し、語り口はあくまでも静かである。極めて抑制した表現のなかに、反って圧さえ切れない熱情がほとばしっている。

夜、死んだ母の夢を見た。
母は、ゆっくりと海を流れていた。

〈忠清北道〉より

数多くの体験をゴツタ煮のように腹にため込んだ著者は絶えずそれ等を反芻している。カタカナ交りの行間に光るその眼ざしは、決して流されてはいない。

牧野 育 (昭和四五年文学部卒業)

内川菊義著

『企業会計原則の基礎理論』

(森山書店) A5版
三〇六頁 三、八〇〇円

企業会計原則はそれ自身の法的根拠をもつものではない。しかし「企業会計原則パラダイム効果」が主張されるほど、この会計

規定は、制定以来、わが国の財務会計制度・理論・実務に多大の影響を与えてきた。本書の目的は、この「企業会計原則のもつ体制的意味ないしその果たす体制的役割」を商法計算規定との対応において説明することに置かれている。

まずポツダム宣言の受諾に始まる「序章」では、財閥解体を背景に企業会計原則成立の経緯が説明され、当初他の法令に対して指導性を発揮した企業会計原則が、やがて商法と対立し徐々に後退してゆく過程が述べられる。

「第一章」は本書の核心的部分をなす。

ここで教授は両者の対立と調整の過程をモチーフに、その原因をなすそれぞれの計算思考の基本的差異に関して面期的な解釈を示される。すなわち従来の「損益計算的思考 vs 財産計算的思考」の図式に依るのではなく、両者はとも共損益計算を志向するものと規定され、その中から新たに「企業の継続を前提とした損益計算 vs 企業の中断を前提とした損益計算」という対立関係を析出される。この立論の基礎には、金融資本的の巨大企業を主たる対象とする今

日、清算よりも経営維持を前提とした損益計算がともに不可欠であり、それゆえ兩者の間にその目的をめぐる決定的対立は存在しえないとする認識がある。さらにこの点から、教授は企業の継続を前提とする企業会計原則の基本的優位性を指摘される。

以下この斬新な構想とこれまでの研究成果をもとに、個々の対立点に対して教授自身の立場から緻密な検討が加えられてゆく(「第二章」継続性の原則「第三章」繰延資産「第四章」資本剰余金「第五章」引当金)。その結果教授は、基本的優位性をもつにもかかわらず企業会計原則が商法と対立し後退を余儀なくされるその主たる原因は、商法が強行法規である点にあるのではなく、上記の諸問題に対する企業会計原則の著しい理論上の誤謬にある、と結論づけられる。そして本来の指導性を回復するために企業会計原則の早期改善を強く望まれるのである(「結章」)。

内川教授はこれまで五冊の主要著書をはじめ数多くの研究を世に問うてこられたが、いずれも社会全体の観点からみて真に公正妥当な会計方法を確立するという姿勢

で貫ぬかれている。本書はその集大成ともいべき珠玉の論文集である。必ずや多くの示唆と啓示を得られるものと確信する。

松本敏史(商学部専任講師)

正木久司著

『日本の経営財務論』

(税務経理協会 A5版
三三一頁 三、四〇〇円)

本書は、著者が前著『日本の株式会社金融』(ミネルヴァ書房 一九七三年)で展開した論点をベースに、対象時点をほぼ現時点まで延ばし、それを日本の経営の財務的特徴として評価しようとしたものである。

もともと著者は、戦後の日本企業の財務的特徴を「銀行融資に過度依存のいわゆる間接金融偏重型の財務構造」とされ、それは「資本市場の未発達」に起因した、いわば「後進型」の特徴であること、したがってそれは当然のことながら、戦前の財閥金融、さらには一見、株式のウェイトが高く表現される非財閥金融も同様であることを指摘されてきたので、あえて言えば、本書の新鮮味はそこにはない。本書の特徴は、著者が言われるように、主として「人事・

労務面ないしは技術面」から論じられることの多かったといわゆる日本の経営論に、「財務面からの貢献」をみようとするところにある。

したがって、本書のポイントは、「間接金融偏重」に「後進性」をみ、企業集団金融に「独占性・閉鎖性」をみる著者が、「デメリットの多いと考えられる間接金融偏重の財務構造は、銀行がともかく企業の必要資金を供給してきたし、その資金量の伸縮によって政府が効果的に景気調整を行い、経済運営の円滑化に役立たせるといって一面を有していた。間接金融偏重型の日本の経営財務は、必要やむを得ざる苦肉の措置として出発しながらも、上述のごときメリットが敢えて指摘できるのである」(三一八ページ)とされ、それは「非近代性」を内包しながらも、企業集団金融と融合して「独占性」と「閉鎖性」を確保して企業の蓄積活動を支えてきた。そのもつ「非近代性」のゆえに露呈する欠陥と闘い、その修復に努めながら、いまや巨大な存在感をもった金融構造として定着しているのである」(三一九ページ)と積極的に評価されるとこ

ろにある。

おそらくこうした評価は論議のわかれるところであろう。さらに、「日本の経営財務論」の充実、本書が捨象されたトヨタや松下、あるいはいわゆる六大企業集団のみならず巨大企業を核とする企業グループの金融構造を包括する必要があるだろう。だが、本書がこうした分野へ一石を投じ、問題を刺激したものであることは間違いないだろう。

最後に、日本の経営財務の生成・日本の経営財務の展開・戦前における株式会社支配・間接金融偏重の財務構造・株式金融の発展・社債金融の発展・企業集団金融の展開・外資輸入の展開・戦後の株式会社支配、の諸章からなる本書を追えば、読者は多様な財務現象を知ることができる。

岡本博公(天学商学部助教授)

内田勝敏著

『貿易政策論』

(晃洋書房) A5版
二四〇頁 二、五〇〇円

物と金(貨幣もまた商品である)は、本来、国境の枠を越えて自由に移動すべきも

のである。人間もまた、地球上の好きなところに移住できる自由が与えられねばならない。人類史の未来が、こうした自由の障壁を撤去して国家が消滅する世界を実現していくことにかかっていることは、あえて多言を要しないであろう。

こうした世界をいかにして平和裡に実現していくか。政治経済学は、その専門を通じて学問的にこの未来への道標をひとつひとつ示していくことに、その任務が与えられているのではなからうか。特に国際経済学は、より直接的にこの任務を背負っている分野ともいえるのである。

ところで、こうした世界が実現した晩には、もはや貿易とか資本輸出といった用語がそれ自体も、多分死語になるであろう。といって、こうした時代になっても、過去の貿易に関する追究が、無意義なものになるというのではない。いつの世にも、歴史の歯車を逆転させようとする勢力があり、これとの学問的対決を迫られるからである。

とすれば、これからの貿易論の研究においては、貿易という用語が生きていた時代の人間社会の営みと、貿易政策との関連を

追究する歴史研究が重要なものになるであろう。内田勝敏教授とそのセミナーの研究者との共同研究の成果である本書が、この点、史的接近という方法を選ばれたことは、誠に当をえている。

この方法を採用することによって、強者の論理と一般的にはなされているイギリス自由貿易主義が、それならの経済的基底をもっていたこと。また、一九三〇年代の保護貿易主義への転換が、世界経済恐慌から脱出の手段に他ならなかったこと。さらに、戦後の世界的貿易自由化傾向に逆行してとられたこの国の保護貿易政策は、過渡的性格のものにならざるをえなかったことなどが明らかにされている。近年の保護貿易政策の効果の限界も、よく分析されるということになっている。

とはいえ、貿易政策とイギリスの貿易や生産の構造、国際収支やポンド貨の動向との関連はよく捉えられているが、いまなお世界金融市場であるシティのダイナミックな動きとの関連の追究は、必ずしも充分ではないように思う。イギリスの経済政策の実態を究めるとき、シティを抜きにしては

その態様の深層的理解には達しえないと考
えられる。おそらく、執筆の研究者たち
は、この究明を次の研究課題として設定さ
れているのではないか。このようにも思わ
れるのではあるけれども。

入江節次郎（大学経済学部教授）

西村幸郎著

『人間への旅立ち』

（ヨルダン社
一二三頁 一、二〇〇円）

人は折に触れてそこはかとなくものを思
う。ときには感動したり、奇異の念を抱い
たり、あるいは義憤めいたものを覚えて心
にとめておくことがあるのではないか。た
だ人はそれを表現し記録することが少な
い。そういうひとは著者から「考えたこ
とを一つのまとまった表現にまで実らせる
時、人はそれを思想と呼ぶ」などと言われ
ると、思わずたじろぐのである。けれども
それが「投げる球、打ち返す球、レシーブ
する球、トスもアタックも、いつてみれ
ば、それは自分の考えを表現すること同
じ」であり、巧拙をとわず「思想とはブレ
ーそのものことである」。じつは「人は

みなそれぞれ一個の思想家であり得る」と
説得されると、なるほどと思わせられ、「考
えるということ」はそういうことかと励ま
される。

この本は西村幸郎氏が日常のさまざまの
ことのなから「身近なことで、正面から
取り組んだり、見詰め直したりしなければ
ならないのに、つい眼をそらしたり、逃げ
だしたりしている問題」のいくつかを「自
らに問いかけ、整理し直すつもりで」とり
出して、「できるだけ切り口を大切に」と、
心して仕上げた」アンソロジーである。著
者が切り口を大切にするのは、ケーキにた
とえば、焼きあげるのと同じくらい切り
口の鮮やかさが賞味を左右するからであ
る。

最初の「考えるということ」に続いて、
自立、人間のきずな、選択、不安と孤独、
もう一つの自己、愛と恋、日本人、楳圓の
思想などの『人間への旅立ち』にかかわる
ことどもが、説得力のある焼き方と切り口
で提示されている。著者は決して大上段に
振りかぶらず、たんと語り、最後のテ
ーマの「ユーモア」では、人間が相対的な

世界に生きていることを説いて、そうだと
すれば、自らの人生も、いつも生きいきと
造りかえていきうるのでと、ここだけはか
なり論理的に詰めている。そして人に不可
避の死に対してさえ、ユーモアをもってこ
の来訪者を迎えることも教えてくれる。

日常のことどもを通して、このような人間
への旅立ちを示しうる著者の円熟に、同世
代のひとりとして畏敬せざるをえない。

なお、瑣末なことだが気になったことを
ひとつ。「考える人」は昭和二五年に神戸
のそれがしから寄託されたそのときから現
京都国立博物館におかれており、大気汚染
のためにいたみがひどくなって京都市役所
の前から移されたのは「アダム」であり、
これは市立美術館に収蔵されている。

宮澤正典（女子大学教授）

中條 毅著

『労使関係の史的課題』

（中央経済社
二〇七頁 二、九〇〇円）

本書は、第一章労使関係の概念とその考
察、第二章政治・経済と労働組合、第三章
技術革新と雇用・労働福祉、の三つの部分

から構成されている。

第一章では英米の労使関係論の相違を論じ、近年日本の労使関係が注目されるに至った事情を説明している。労使関係論についてはアメリカでは人間関係論や行動科学が重視されているのに対し、イギリスでは経済学がベースになっているという。しかし私自身は、そうした差異が仮にあるとしても、それは正に論としてではなく実態としての労使関係それ自体の相違の反映であって、論として方法的に相違があるとは思われないのだがどうであろうか。J・T・ダンロップの『労使関係制度』（一九五八年）以来、英米ともに職務をめぐるルールの研究というように自己の対象を限定してきた。この点に差はないのではないだろうか。

一九七〇年代に先進各国の成長率が鈍化し失業問題が深刻化したのが、この過程で確かに日本の労使関係が注目されるようになった。著者は、この過程を踏えてインダストリアリズムの言う収斂理論が破綻する傾向と新たな拡散理論の登場に言及されている。私自身は、その上で、日本をモデルに

新しいパラダイムを構想する絶好の場所に我々がいるという自覚が大切だと考える。

この場合、アメリカが近年、人的資源管理に焦点をあててきたが、それは多分に日本モデルへの収斂を意味している。日本の実態とアメリカの収斂の限界を厳密に調査する必要があると感じた。

第二章ではベルンシュタインを中心とするマルクス主義の修正の動向をいわば学説的に紹介している。論旨は納得的であるが、本書全体の構成の中の違和感はまぬかれない。私は、マルクスの革命論への批判的論潮を、本書の重視している窮乏化緩和をベースに理解するだけでなく、一九世紀後半から今世紀にかけて団交や労使協議の体制側の受容といった労使関係制度の展開をベースに理解すべきだと考える。そうすることによって『労使関係の史的課題』というテーマによりフィットしたのでないだろうか。

第三章の七〇年代初頭の労働者の世界的反乱と日本でそれが大きくは問題にならなかったことが記されているのは興味深い指摘である。それは何に由来するのか、この

辺りが日本の労使関係を把握する鍵のように私には思われた。

石田光男（大学文学部助教）

木下長宏著

『敦煌遠望』

（五柳書院
二四五頁 二、二〇〇円）

紹介者は敦煌の美術作品について何も知らないことをはじめに断っておきたい。したがって本書の美術史的知見については言及できない。あえて紹介の筆を執ったのは、ただ木下長宏氏の仕事に従来より関心をもっていただけにほかならない。

本書の構成はつぎのとおりである。

第一章 敦煌への道

第二章 莫高窟美術史の可能性

第三章 起源からの問い——最初期の莫

高窟

第四章 初期——継がれていくもの

第五章 中期——中原文化の余韻をひび

かせて

第六章 後期——独立王国へ

第七章 晩期——回帰するもの

第八章 敦煌的なるもの——最晩期の莫

みてのとおり莫高窟の美術作品を通史的にたどっており（おそらく敦煌美術史の時代区分としてはかなり斬新なものである）、全体を通して意図されているテーマは「敦煌なるもの」を見定めること——つまり「中原文化」との距離を測定すること——である。

本書を讀んで心にのこったことをあげてみる。敦煌研究が二〇世紀にはいりヨーロッパ人によってはじめられたこと——それは近代のアジアの歩みを象徴する。「中原文化」との対比における敦煌文化の独自性——それは特殊を包摂するアジア像に関連する。美術史の本としては異例であるが、本書には意識して挿図や写真をのせていないこと。著者は相当量の資料や研究書に目を通しているにもかかわらず、作品の記述には現場での感受性を重んじていること——著者の言葉をつかうなら体験で作品をとらえきる態度に徹するということとなる。しかし作品解釈は感情におぼれず、どこまでも客観的であること。敦煌の工人たちの造型意識に迫ろうとする意欲と諦観と

の交錯。一般の評価に安易に身をゆだねまいとする心意気。敦煌美術における清代・中華民国の色合いを正当に評価していること、などなど。

右にあげた本書の特長は、著者の視座が近代のアジアにおかれていることからくると思われる。留学先のフランスから敦煌（アジア）を遠望するという著者の逆倒した位置感覚が本書をたんなる美術書に終らせなかつた大きな要因である。敦煌の美術史論としてどれほどの成果をあげているのかは紹介者にはわからないが、少なくとも本書が木下氏の作品となっていることはまちがいない。

露口卓也（大学文学部助教授）

森 浩一編

『考古学の先覚者たち』

（中央公論社 B6版）
（三六六頁 一、八〇〇円）

本書にとりあげられている人物は二十四名にのぼる。すべて江戸時代中期から幕末までの間に生れた人たちである。「I 弄石の学から考古の学へ」では木内石亭、三木長嘯、田村三省、泰棹丸、橘茂世、松森

胤保、蓑虫山人、ハインリヒ・シーボルトを、「II 好古と金石の系譜」では谷川士清、藤原貞幹、上田秋成、木村兼霞堂、三浦蘭坂、青柳種信を、「III 天皇陵と古墳研究」では平野庸脩、本居宣長、覚峰、竹口榮齋、関重巖、蒲生君平、山川正宣、矢野一貞、平塚瓢齋、谷森善臣をリストアップしている。各人物の略伝と業績を概観し、参考文献を付してある。執筆者はバラエティに富む。

本書を見ても思ったのは、われわれは登場人物のうち何人知っているだろうか、ということであった。有名な人物も幾名かはあるが、私など近世思想史をやっているにもかかわらず初めて名を耳にした人も多い。これらの学問業績は現在にも参考にしうるものである。にもかかわらず一般に、あまり名が知られていないのはどうしてなのか。

かれらは、森浩一氏の言葉をつかえば「日本の土地に根ざし、日本の生活のなかから生みだされてきた物の考え方」をもった「土の中の思想家たち」である。かれらの学問は、本書中の用語をかりれば「日本

的考古学」である。かれらの活動は、名誉や地位という報酬を期待してではない、各々が自発的に、何物かに魅せられたからにすぎない。そしてかれらの遺産は決して少なくない。

本書は、われわれの前に二十四名（その周辺にはそれぞれ多くの支持者がいたのだから、その数は相当なものとなる）もの「手づくりの思想家」を並べてみせた。われわれはまずその量に驚かされる。しかし何故に歴史学はこれまで外来思想の受容とといったことには熱心であつたにもかかわらず、こういった人物を積極的に取り上げようとしなかつたのであろうか。

本書の編まれた意図は、第一に近代考古学以前の学問的努力に対する顕彰、第二に近世考古学説のトレース、第三に「土の中の思想家たち」を歴史学の正当な対象に据えること、などであろう。その意図を明確にするには量をわれわれの前に提示してみせる必要があつた。

本書を読んで、人物輩出の時代、陵墓研究と国学との関係、各人物伝の詳説、といった問題が頭にうかぶが、しかしそれらは

つぎの段階でなされるべきことで、本書の課題ではない。なぜなら本書は、われわれに対する問題提起の書であり啓蒙書であるのだから。

最後に蛇足ながら、本書のカバーの蓑虫山人筆「古陶之凶屏風」が大へん美しい。

露口卓也（天文学部助教）

坂本武人著

『生活設計と家計簿診断』

（ミネルヴァ書房 A5版
二二八頁 一、六〇〇円）

健康に生き続け、文化と連帯のあるくらしを実現するには、①社会や経済のあり方を考え、②家庭生活を守る家政のあり方を考えるという二面への複眼的な視点が必要とされる。家政のポイントは、家庭生活を構成する諸側面を、衣・食・住・家族という縦割りに捉えるのみでなく、それらを成り立たせている共通の要素、即ち、家計・生活時間・家事労働を人との関係に於て横割りに捉え、衣・食・住・その他、全体の

組み合わせを家族・個人との関係に於て、適合状態にあるように自ら計画し、種々の問題を解決して行くことである。

著者は同志社女子大学の家庭経済学の教授であり、長年のあいだ、生活設計について論考するとともに、消費者行政に多くの提言と協力を行つて來られたが、一九七六年いらい家計簿診断を数多く実施し（サンケイリビング新聞、京都リビング新聞の家計簿診断の欄を担当し、両者を合わせると現在まで五百世帯以上の診断を行われ）ここ十年間の日本の家計簿をつぶさに見て來られた。そして、この理論と実感に基づきながら生活優先の立場に立ち、家計簿診断をふまえて、現代における生活設計のあり方とその意味づけを掘りさげて探究された。本書はその成果である。

本書の前半においては、長期の生活設計、短期の生活設計の必要性と方法について述べられ、本書の後半においては、いま家計運営において、具体的な問題や不安を持つている主婦から寄せられた悩みに耳を傾けながら、それについて著者が下した判断（家計簿診断）を、家計のそれぞれのライフ・ステータジ別、問題別に整理してまとめられたものである。

本書の特徴であり、長所である所は、①

個々の家計簿に対する診断を下す際、その家計に固有の問題と社会全体の生活に潜む問題から派生する問題とが交錯しているという視点に立って、それぞれの悩みや不安に対処している。②生活のあり方を考える家計簿診断を、単に家計簿に限定するのではなく、広く生活診断として考えられている。③人間としてぬくもりのある生活こそが一番大切であるという視点に立ち、生活の目的と手段とはっきり区別して考えている所である。五二の家計簿診断の実例の呈示も非常に有用である。

社会の大きな変化の中で、私達の生活はかわって来ているので、あらゆる世代において、各々の生活の見直しを行い、よりよい生活設計を行うことが必要である。本書は、若い世代のみでなく中高年世代にも一読を進めたい。

紀 嘉子 (女子大学教授)

佐野安仁・吉田謙二編

『成長と交わり』

(晃洋書房 A5版)
二七二頁 二、九〇〇円

本書は、教育哲学の根本課題ともいっ

き「人間の成長と交わり」の理論的究明に正面からとり組んだ、意欲的な問題提起の書である。しかも七名の共同執筆者は、いづれも同志社に学び、あるいは現に同志社で教える、いわば同門の研究者達であって、専門の分野は、哲学、倫理学、教育学、体育学の種々に分れてはいるが、教育への共通な問題意識と、共同的研究の交わりのつみ上げによって、このような共同著作の成果を得られたことに心からのよこびをおぼえるものである。

本書の内容は、三部に分れ、まず「交わりの前提」として、自由と道徳(訓練)の問題がとり上げられ、ドイツ観念論におけるカント・フィヒテ・ヘーゲルの教育論、およびルソーの教育論に基づいて論究がなされている。つぎには、「交わりの展開」として、対話の理論と成長の理論が、それぞれ実存論的立場と、デュイイのプラグマティズムの立場から論じられている。さらに第三部には、人間の「交わりの様態」を三つの視点、すなわち身体・知性・精神(body, mind, spirit)の三点から、それぞれ、ムーフメント・エデュケーションの理

論、バートランド・ラッセルの教育論、フエニックスの究極的関心の教育論の立場に依拠しながら追究している。

人間は、人間らしい真の交わりをとおして望ましく成長をとげるが、真の交わりは、成長の自由を保障されている人間においてはじめて可能となる。交わりなくして個人の成長はあり得ず、個人の自由なくして真の交わりはあり得ない。教育はまさに人間の成長をめざす人間の交わりの事実であり、実践である。今日、教育の荒廃が叫ばれる問題的状况の根は、実は「成長と交わり」への認識と対応の貧困に存するといっても過言ではない。本書において、成長と交わりに関する凡ての問題が論ぜられているわけではないし、編者の「あとがき」にもあるように、残された問題もあるが、本書が、いわゆる教職教養の指導書としてでなく、教育哲学の根本問題を人間の視点をつねに保持しつつ、どこまでも理論的に解明しようとする努力された足跡を確認せしめる豊富な内容を具えた著作であることに心からの敬意を表する次第である。

酒井 康 (女子大学教授)

松山信直編

『アメリカ文学とニューヨーク』

(南雲堂
三〇〇七頁 三、〇〇〇円)
B6版

「ニューヨークに対する最初の印象は、騒音、無秩序、いつまでも続く地揺れのよ
うな状況への嫌悪観である。だが、今度こ
の台風の目の中にどっしりと腰を据えて感
じたことは、機械の律動音であり、リズム
である。断言出来ることは、一度この運動
の中にあつて心の安らぎを得るようになる
と、他の全ての場所が生氣のないところに
みえてくるということである。」(W・ジェ
イムズ、一九〇七) アメリカの作家にみら
れるこの種の屈折した都市観については、
金関氏やハウ氏がその論文の中で指摘して
いるところであるが、『アメリカ文学とニ
ューヨーク』に集められた論文の中には残
念ながらこれを立証するものがない。ニュ
ーヨークを讚美するとは言わないまでも、
この都市の躍動感を抱えたのが主としてモ
ダニズムの芸術の分野であることを考えれ
ば当然のことかも知れない。だがニューヨ
ークの作家に対するマイナス効果だけが強

調されているのはどうも気になるところで
ある。異質文化の集合体としてのニューヨ
ークは、各文化によってその観方が異なる
のは当然のことであるが、その点白人作家
と黒人作家の都市観という観点からみて、
加藤氏のポールドウィン論は示唆に富んで
いる。だが、女性作家の都市観を論じたも
のが無いのは少し残念である。こういう把
え方は、いわば無いものねだりであつて、
台風を外側から観た印象に過ぎない。ジェ
イムズ流にその「目」の中に飛び込んでみ
ると、個々の作品には力作が多いからであ
る。特に印象に残るものとして、永原、松
山、岩元各氏の論文をあげておきたい。永
原氏のマーク・トウェインとニューヨーク
を扱った論文は、全く新しい視点に立ち、
しかも実証的で説得力をもっている。松山
論文は、都市対田舎という二極化の傾向
を、多分に知識人の自己満足から来る観念
的産物としながらも、「神話的田舎」の強
調は、「都市の救済・再生」が目的である
とする指摘は大いに傾聴に価する。これ
は、知識人一般にみられる「反都市観のパ
ズル」(レオ・マークス)に対する一つの解

答であるといえよう。岩元氏のカポレー
ティ論はこの論集の中で、都市をプラスの要因
として扱えた唯一の論文である。これは
「都市と文学を公正」な眼でとらえようと
するものであり、都市経験と文学的衝動と
の関係を立証しようとする力作である。し
かし、一般に経験と文学的衝動を考へる場
合、カポレーティにあつてはプラスの効果と
して観ることが出来るとしても、一体、経
験がプラスの要因とならないのはどうい
う場合か、という疑問がどうしても残る。

樋口秀雄 (大学法学部教授)

笠井昌昭・竹居明男・佐々木進訳注

『訳注本朝画史』

(同朋舎
五四七頁 一三、〇〇〇円)
A5版

戦後の歴史学の飛躍的發展に伴つて、日
本美術史もまたここ四十年余にわたつて、
方法的反省が加えられ、新作品の発見、
研究、解釈、体系化と目覚ましい進展を遂
げた。しかしこと絵画史に関して言えば基
本文献である「本朝画史」の研究書すら未
だ世に出てはいなかったのである。今回出
版された「訳注本朝画史」は、まさにその

立ち遅れを正す学界待望の書といえよう。

あとがきによると、本書はもと笠井昌昭教授の昭和四九年度大学院ゼミナールの輪読会から発展したものである。以来五六年度までの七年間に輪読と共同討議が続けられ、いま五五〇頁に及ぶ大部の訳注が完成した。その間に、当時大学院生であった竹居明男氏は新進気鋭の助教授となられ、佐々木進氏は講師として各々研究と学生の指導にあたられるようになった。教授と若い優れた弟子の共同制作としてこれ程羨むべき業績があるだろうか。

本書は原著者狩野永納の著す元禄六年版六巻本を底本としている。内容を略記すれば、巻之一に画原、画官、画所、画考、画運、画式、画題として日本絵画史観を垣間見る総論を述べ、巻之二上古画録に唐絵、大和絵の画家一四七人の画人伝を、巻之三には中古名品として宋元画の流れを汲む一六〇人、巻之四には専門家族と狩野家累世所用画法として、狩野派、海北派、長谷川派を交えて二四人の画人伝を載せている。巻之五は雑伝、補遺で、各々四六人、二八人の画人を収録し、附録に画材の解説を付

す。そして巻之六画印において、一八五人の画印、署名、小伝を採録して終る。

本書はその全てにわたって逐一返り点、送り仮名を検討し、読み下し文を掲げると共に重要語句、人名の克明な注を付し、関係資料と参考文献まであげるものである。これから本格的に美術史研究を志すものの必読の書となるであろうし、美術研究の中途にある我々も教えられる所が甚だ多い。この永年にわたる労苦と見識に敬服すると共に衷心感謝を捧げるものである。

原著者永納は京狩野の祖といわれる狩野山楽の娘婿山雪の子である。本書はもと父山雪の発案になるもので、百余人の画人伝を録したが未完のままで父は歿した。永納はその志を継ぎ、四百余人の画伝を収録して完成したのである。山雪歿後二十三年、永納は四十四歳になっていた。これに儒学者林鶴峯と広島藩医黒川道祐が跋文を書いている。この、世に残る優れた書には親から子への二代にわたる努力の集積と碩学の支援、そしてその正統性を保証して読み継がせるに、江戸幕府三百年にわたる唯一の御用絵師として、アカデミズムの牙城を築

いた狩野派の「がっちりとしたガードがあったのである。」

橋本綾子（文学文学部教授）

北村日出夫著

『テレビ・メディアの記号学』

（有信堂 二二五頁 一、八〇〇円） B6版

Homo Medius シリーズ第一巻として上梓された本書は、序章「テレビ時代劇Ⅱ」マンネリズムの構造」を枕に、前半部で「テレビ・メディアの記号学」の基礎づけのための概念的枠組みを呈示し、後半部では、実践的「テレビ・メディア」論を自由自在に展開している。

キー概念は、シリーズ・タイトルも示しているように、「メディア」である。著者の言う、「記号」を具体化し、「記号作用」を人と人との間で機能させる媒体としての「メディア」は、いわゆるマス・メディアやパーソナル・メディアに限られず、われわれの日常生活をひろく記号学的に解釈するための汎通的、構成的概念であるといえる。著者は、「記号」と「メディア」の階層性についての巧みな「微分的」分析（2

章)を通して、「メディア」の普遍的特性のみならず、個々の状況の重層的、複合的総体としての日常生活の中で、それが機能する際の具体相を提示することに成功している。この点や他の随所に認められる、概念分析の具体的視座が、本書の魅力の一つとなっていると同時に、「記号学的な発想」を導入することによって、従来のマスコミューニケーション論を刷新しようとする著者のねらいを、説得力あるものにしてている。

さらに、前半部での基礎的諸概念(「情報」、「記号」、「メディア」、「コード」等)の定義・分析は、後半部で展開される多様な実践知とうまく結合している。例えば、「記号・メディア」の階層性論は、「メディア」としてのテレビの特性を際立たせる諸見解に、また「コード」・「テキスト」論は、著者独自の「観客」論に、有効な理論的支えを与えている。

総じて、本書の基底にある「私なりの記号学」の構想は、——「情報化社会」論や「ニューメディア」論への批判的姿勢にだけでなく——流行の現代(文化)記号論の一定の傾向への批判的、戦略的姿勢に根ざ

しているように思える。現代の(文化)記号論が、言葉(記号)を、エルゴンとしてのみならずエネルギーと捉える、W・v・フンボルト以来の知見の豊かな意味を復権させながらも、次第にエネルギーの自律化論の背後に、文化創造の担い手としての「個々人の主体的行為」を置きざりにしつつある傾向に距離をおきながら、著者は、記号学的諸概念の独自の定義を通して、人間の主体的活動を基軸とする「記号学的メディア論」を説得力ある仕方で開催している。

田端信廣(大学文学部専任講師)

三宅一郎著

『政党支持の分析』

(創文社 A5版
二八四頁 七、五〇〇円)

本書は60年代から70年代にかけてほぼ10年の間隔をおいてなされた全国の世論調査に主として依拠して、日本人の政党支持の特性およびその変化を統計学的手法によって分析したものである。著者はすでに地方レベルでの政党支持に関する調査研究書(『異なるレベルの選挙における投票行動の

研究』創文社、一九六七年)を上梓し、高い評価を得ており、本書はわが国における政治意識と政治行動の研究の一環として全国レベルの把握を旨とし、国際比較が可能なりや方で展開されたものである。

著者は「序」において政党支持態度という心理的変数が政治意識の研究でいかに重要であるかを明らかにする。政党支持はそれ自身が政治的態度の中で、遍在性、安定性、規定性、代表性をもつが故に政党アイデンティフィケーションとして最も重要な指標となりうるからである。世論調査において「あなたは何党を支持しますか」という質問にたいする回答を規定する要因は、一般的には学歴、職業、所得、宗教、社会経済的地位などのデモグラフィックな諸変数であり、これらが投票行動の差異を説明する社会学的要因として重視されるが、著者はこれを家族や所属組織による「政治的社会化過程」、職業や年齢階層集団などの「社会集団」、「経済的生活意識」、「政策意見と政治イデオロギー」、「政治的関心とシニズム」という五つの観点から解明しようとする。数量化理論を駆使して描かれた

わが国有権者の特徴のいくつかは、たとえは、安定した政党制をもつ国に比べると一定の幅ではあるが、しばしば支持政党を愛えること、家族は日本においても政治的社會化の重要なエイジェントであるが、親の世代の影響から離脱し対立する傾向があること、職業が政党支持を決定するうえで大きな要因となることに変わりはないが、ヨーロッパの諸政党と比べると、支持者は複数の職業カテゴリーからなるという意味で、階級政党というよりは包括政党と呼びうること、わが国においても選挙における政策争点の投票行動に与える影響が決しないわけではないことなどであり、われわれがなんとなく常識としてきたり、思いもしなかった投票行動の諸側面を経験的に論駁しかつ確証してくれる。

本書で評者が最も興味深く思われたのは、「忠誠派」「消極派」「無党派」「委任派」と呼称された四つの政党支持類型を抽出した第二章であった。特に「消極派」は「政党」よりは「政策」中心の投票行動を行う「新しいタイプの有権者」とされるがゆえに、この派の存在と動向に注目したい。

著者は数量化理論による分析の有効性を遺憾無くわれわれに示すと同時にその限界をも熟知し、結論はしばしば自制的であるが、わが国有権者の合理的政党選択の一面を強調するなど意欲的でもある。全国的調査に基づく政治意識の体系的な研究はこれまで稀であったと言ってよく、本書は今後わが国における投票行動論の研究者が避けて通れない作品となろう。

青木康容（大文学部助教）

日本基督教団京都教会百年史編纂委員会

『京都教会百年史』

（日本基督教団京都教会
二一、八七五、二四頁 四、〇〇〇円）

A5版

今年の一月十五日、日本基督教団京都教会の創立一〇〇周年記念式典が京都教会でおこなわれた。美事な装いで、九〇〇頁になんなんとする立派な『京都教会百年史』をこの日、われわれは手にした。当日の式典は過ぎ去った百年の歩みに「感謝と懺悔」を、現実の教会に「信と愛」を、そして教会の将来に「希望」を表白すを意を尽したものであった。午後は多くの会衆による、まさに「和氣満堂」の祝賀会であつ

た。当日午後、秩父宮ラクビー場では学生日本一の同志社大学ラクビー部と社会人日本一の新日鉄釜石との間に、最終の王座を決定する試合がおこなわれ、祝賀会の席上においても、覇権の行方を気遣う、そこはかたない雰囲気を感じられた。そしてこの日、大学ラクビー部はその王座を新日鉄釜石に譲った。

本書を紹介するに当って、少々とっぴで、不謹慎な比喻と言いつい出になったが、由来、日本の近代史における宗教・思想、とくにキリスト教会の足どりとその歩みに関する研究とその成果は「隅ヲ照ス」ものではあつても、決して近代の日本の大河の流れの水域を大きく占めるものではない。しかし、同志社とわけて深い関係をもつ教会も、あに京都教会に限られるものではない。したがって『京都教会百年史』をかかる比喩の中で紹介することは、はなはだ粗枝大葉、場違いの批評に類することを思わざるをえないが、本書はその編纂の方途、「感謝と懺悔」、「信と愛」、「希望」を過去・現在・来未に見据えた叙述姿勢、その内容において、一京都、そして同

志社という域を超えて、今後編纂さるべき教会史のモデルとしての座を占める教会史の一つと言っべきであらう。しかして、それは一教会史にとどまらず、日本の近現代史における「地方」の歩みをたどることになる貴重な里程の一つとなるであらう。

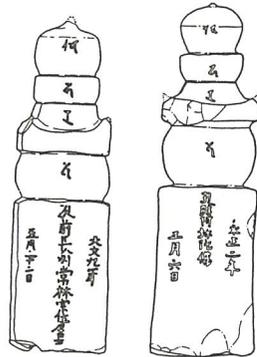
第一章胎動期における池袋清風日記の駆使、西第第一、第二、第三公会の名簿の丹念な分析、第二章誕生期における四条教会仮日記、会員戸籍を使った叙述、第三章形成期、第四章伸展期、第五章成育期に見られる豊富な叢書資料の紹介、第六章の戦時下の苦難期、第七章再生期、第八章内実期の克明な筆致で綴る教会の足どりは、各章に設けられた「同労の人びと」の叙述とともに、この教会の躍如としてあたたかな教会像とこの教会にかかわる人間群像をわれわれに示してくれる。

杉井六郎（大学人文科学研究所教授）

同志社校地出土の埋蔵文化蔵(8)

鈴木 重治

いっせきごりんどう
一石五輪塔



室町時代後期 高さ・58cm (左)

一九七五年十月 同志社大学光塩館地点出土

同志社の今出川校地が、江戸時代に公家屋敷であったことは、すでによく知られている。それでは、公家屋敷以前は何があったのか。

宮内庁書陵部蔵の寛永十四年（一六三七）の「洛中絵図」をみると、御国母様下屋敷、つまり東福門院の屋敷が、現在の女子部の全域と、大学の法経研究室や人文研などのある光塩館、啓明館あたりを占めて

いて、その西北の地域に「報土寺」という寺が記されている。アーモスト館やゲストハウスあたりに相当する。

発掘調査によると、女子大学の図書館や大学の光塩館の地点では、墓地にかかわる遺物が出土している。ここに示した一石五輪塔もその一つである。

光塩館地点だけでも、碑名のおきらかな一石五輪塔が13基検出されていて、それらの年号をみると、永正二年（一五〇五）から天正十一年（一五八三）にわたるものであって、天文年間（一五三二～一五五四）の紀年銘資料がとも多い。つまり、16世紀の墓碑群である。

図示した2例を含めて、ほとんどの表面が火を受けて荒れているが、扁平な風輪、火輪の四隅の立ちあがり、さらに長く延びた地輪の形態などに特徴があつて、五輪塔の様式を確認する上で好資料となつている。

なお、今出川校地内で墓地に関する遺構が検出されているのは、女子大学の楽真館前、大学の明徳館西北地点、大学図書館西南地点などである。

ちなみに、墓地の跡に住む集団は、必ず繁栄するという伝承を信じている人も多い。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）